



巻頭言

「次の25年に向かって」

(財)日本植物調節剤研究協会 評議員
バイエルクロップサイエンス(株)
開発本部生物開発部

早川秀則

本年4月上旬、高知県伊野の園地では新高ナシの花が一面に咲き乱れ、周囲の緑と青空を背景にして何とも爽やかな景色でありました。それから約1ヵ月後の連休後半、青森県弘前の郊外ではリンゴの淡い花が開き始め、岩木山の勇姿とともにこれもまた見事な眺望が広がってありました。そして6月に入り、茨城県鬼怒川の近くではソバの花が一面に咲き乱れ、そこだけとても懐かしい風景を織り成していました。日本の田園の風景の何と豊かで美しいことでしょうか。

今を遡ること25年前、私は某大農学部環境保護学科の一研究室に所属しておりました。当時の研究室の主要テーマの一つは、様々な大気環境汚染物質の動態を植物影響を通して評価することにありました。例えば、硫黄酸化物(SOx)・窒素酸化物(NOx)・オゾン(O₃)等の大気汚染ガスや酸性雨等が植物の光合成や生長等に及ぼす影響などが盛んに研究されておりました。私が選んだテーマは植物の生長と水の関係—特に水ストレス—でしたが、その背景には、世界の農耕地の凡そ三分の一では水が作物生産の制限因子となっていることを学んだのはこの時でありました。

ところで、私と尾瀬との付き合いも、既に25年を越えました。初めて入山した年は冬期の積雪が特に多い年で連休だというのにまだ深い雪が残り、湿原の所々では融雪で生じた水溜りの上に木道が浮遊しておりました。また、うっかり池塘の上を踏んでしまうと腰から上まで浸かってしまうこともありました。今日の尾瀬は数千年の歴史の上に成り立っていますが、この25年ほどの間にも少しずつ変化は見られています。例えば、湿原の部分的な乾燥化や木本類の進入などは、この変化の一部として捉えることができそうです。これらの変化は、必ずしも尾瀬と

いう限られた地域内に特有の変化である場合だけではなく、一方で広くこれを取り囲む環境の変化との直接間接の関連性に目を向けることが大切であると思われます。

私が環境と向かい合うようになってからの四半世紀、時代は「保護か開発か」というアンチテーゼに象徴された対立の時を経ながらも、調和に視点を置いた技術の時代へと向かいつつあります。この間には、環境保護に関して実に多くの研究や啓発活動、そして具体的な技術の開発が進んでいます。これら環境問題ならびに環境そのものに対する意識の変化や高まりとともに、我々は個々の問題が個別には解決しにくいことを学びつつあります。それは、地球が一つの有機体として機能していることを示す具体的な事例が一つまた一つと明らかになって来たことも大いに関係しています。

一方で、作物生産の制限因子の一つである病害虫あるいは雑草をコントロールしようとする人類の英知は、これまでその目的を献身的に果たして来ました。植物防疫技術の今後を展望する時、全地球的な視点からこれを捉え、変化する環境との調和・共生を思いやることにより、その将来には新たな技術の展開が期待されると思います。そして、農業を含めた植物防疫技術に課せられた使命と可能性はこれからも決して小さくないことを信じて、次の25年に向かって一步一步確実な技術を提案できるよう努力して行きたいと考えております。

今年も8月を迎えた頃には、真夏の強い陽射しの下、道行く人の多くが気づくことのない地味なイネの小穂が、いつもと変わらずたくさん花を付けることを願って止みません。そして、再び黄金色の秋が訪れた時、誰もが心の奥底に眠る原風景に想いを馳せることを。